

新型コロナウイルス感染症患者家族に対する終末期看護 —終末期となった患者と家族への支援のあり方—

病院名	藤沢市民病院
職種・所属	看護師 救急 ICU
発表者氏名	佐々木 彩
協力者氏名	福田隆 宇田川信幸

【はじめに】

当院は湘南東部医療圏唯一の第2種感染症指定医療機関であり、数多くの新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)患者の受け入れを行っている。今回、COVID-19で呼吸状態が悪化したため体外式膜型人工肺(ECMO)を導入したが、脳出血、多臓器不全により終末期となった患者と家族の看護を経験した。COVID-19により終末期となった患者と家族への支援のあり方について、症例を振り返り報告する。

【倫理的配慮】

看護部倫理委員会の承認を得た。また、発表については家族からの同意を得た。

【事例紹介】

70代、男性、現病歴：発熱あり PCR陽性判定、COVID-19の診断で入院となる。家族構成：妻と二人暮らし。

【看護の実際】

患者は、妻が面会可能となった時には病状が進行し、すでに終末期の状態であった。感染隔離のため深刻な病状であっても、妻は直接面会することはできなかったが、患者の姿は病室の窓から確認できたため、窓越しでの面会を実施した。看護師は、妻の希望に添って夫婦だけが知っている呼び名を妻に代わって患者に伝えた。患者はその後、お亡くなりになり、納体袋にご遺体を納めることとなった。その前に、妻から顔が見える位置にベッドを近づけて最期の対面を行い、窓越しで患者の手と妻の手を合わせた。最期の時まで妻の思いは、看護師を通して患者に伝えられ、看護師も妻と共に患者の死と向き合った。

【考察】

COVID-19患者の受け入れ当初は、情報が少ないなかで、医療者の安全も確保しつつ模索しながら終末期にある患者と家族を支援した。妻に的確な情報を伝えて最善の治療が行われていることを共有し、感染隔離のために直接寄添うことができない精神的苦痛など全人的苦痛を理解して妻を支え、面会環境を整えたことは全人的苦痛の緩和となったと考える。また、妻に寄り添い感情の表出を受け止め、思いを傾聴して共感することで信頼関係の構築につながった。さらに、信頼関係性を保つことでニーズを把握し、患者へ家族の思いを伝えることができた。

【結論】

1. 感染隔離により患者や家族は強い心理的反応に影響することを考え対応する。2. 終末期看護の概念を多角的側面で整理し、患者家族のニーズを把握する。3. 看護師の直接ケアや、チーム医療が効果的に機能しているか確認しながら、終末期医療を提供できる組織体制を整備していくことが大切である。